



Title	異論派兄弟ジョレス&ロイ・メドヴェージェフによるロシア革命史再審と農業展望：農業・農民史研究の視点から[論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	佐々木, 洋
Citation	北海道大学. 博士(農学) 乙第7097号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77999
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yo_sasaki_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称: 博士(農学)

氏名 佐々木 洋

審査担当者	主査	教授	坂下明彦
	副査	教授	坂爪浩史
	副査	准教授	朴 紅
	副査	准教授	小林国之

学位論文題名

異論派兄弟ジョレス&ロイ・メドヴェージェフによる
ロシア革命史再審と農業展望
—農業・農民史研究の視点から—

本論文は序章、終章を加え6章からなり、図5、表62、文献301を含む、総頁数134の和文論文である。別に13編の参考論文が添えられている。

科学者ジョレスと歴史家ロイのメドヴェージェフ兄弟は、旧ソ連社会の体制的病理を、内側から解き明かし、世界に発信し続けた異論派として知られている。本論は、この兄弟が試みたロシア革命史の再審の内容を3つの著書の相互関連と理論の発展を通じて明らかにすることを課題としている。3つの著書とは、共著『フルシチョフ権力の時代』1976、ロイ『10月革命』1979、ジョレス『ソヴィエト農業』1987、である。特に、農業・農民史研究の視点から土地革命ならびに集団化の問題を整理し、ストルイピン改革で創出が目指された「クラーク」の廃絶こそが最終的にはソ連の崩壊へつながったという指摘が兄弟の最大の功績であることを明らかにしている。

以上の序章での概説を踏まえて、第1章「共著『フルシチョフ権力の時代』のソ連農業史再検討の試論」では、この共著がフルシチョフ時代の「希望と失望」、「功績と失政」の研究であることを示し、ロシア革命史再審に結実していく論点をとり上げている。第一は、ソ連が穀物輸入増大を金塊売却や原油輸出でカバーしている点、第二は、フルシチョフが集団化以後の農村における農民的伝統の喪失の意味を理解しなかった点への指摘であるとしている。

第2章第1節「『10月革命』—ロシア革命史再考」では、この著書が戦時共産主義の過ちとその根源の考察に中心課題があったことを指摘している。そのなかで、土地を取得した中農層は、穀物の無償譲渡に納得しなかったこと、政権が1918年にネップを導入していれば、反革命勢力との内戦も最小限に留まったと指摘している。ここでは、レーニンの発想や行動の分析に、フルシチョフの性急さや視野の狭さを考察した前著の経験が活かされていることを明らかにしている。

第2節「『ソヴィエト農業』—ロシア革命史再審とソ連崩壊の示唆」では、この著書が革命前には穀物輸出大国であったロシアがソ連時代、特に1970年代以降は慢性的な穀物輸入大国へと転落する過程を鳥瞰したソ連農業史研究であると位置づけている。同書はまた、ゴルバチョフ就任時に原油価格の暴落が「産油国」の恩恵で弥縫してきたソ連経済の「アキレス腱」である農業の危機を顕在化させ、ソ連の崩壊を予言したとしている。さらに、農業・農民史を跡づける過程で、前2著の成果を敷衍することにより一連の「ロシア革命史の再審」を試みる労作となったことにあるとしている。

第3章「メドヴェージェフ兄弟がロシア革命史再審を成しえた五つの所以」では、メドヴェージェフ兄弟がロシア革命史再審を成しえた五つの所以を指摘している。第一は、歴史研究の選択肢的方法であり、第二は、ロシアの割替共同体を分割地所有農民への過渡的形態であると位置づけた点、第三は、クラークとは家族労働を基本とする富裕農民であるとした点である。さらに、第四には、ネップ期にはこの分割地所有農民の成長がみられたとした点、第五には「埋もれた」実証文献に着目した点である。

第4章「ソ連社会主義の農業経験からまなぶ世界史的教訓と農業展望」では、ジョレスが提示したソ連農業の失敗とその世界史的教訓をとり上げている。教訓の第一は、農業とは地域の気候・

自然環境・人間社会の三者の理に叶う関係性であること、第二は、農民と大地との絆は独立自営農民の家族労働経営によってしか鍛えられないということである。これは現在、人類が問われている持続可能な人間社会の農業展望であるとしている。

終章「結論と展望」では、メドヴェージェフ兄弟が試みたロシア革命史の再審の内容を3つの著書の相互関連と理論の発展を通じて明らかにするという課題についての再整理を行っている。ロシア革命が、労働者の革命とともに、あるいはそれに先行して農村革命を伴っており、この革命の構図を理解しなかったソビエト政権は「戦時共産主義」を強行して、内戦の激化を招いた。また、ネップ期に再び推奨されたストルイピン改革の延長上に位置づく分割地所有農民の育成策が、集団化の強行によって壊滅されたことが、ソ連農業の脆弱化を招き、ソ連崩壊の引き金になったという理解である。

このように本論では、メドヴェージェフ兄弟の労作を農業史・農民史研究の視角から再整理し、豊富な付属資料を付け加えることで、ロシア革命史の成果を体系的に整理している。この古典的著作をつうじてロシア革命論の到達点を示した点は学会への大きな貢献であり、またその教訓としての分割地所有農民の歴史的意義の指摘は今後の農業の主体を考える際にも示唆に富むものである。

よって、審査員一同は、佐々木洋が博士（農学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。